本願酬報の仏土

藤 嶽 明 信

親鸞が開顕しようとした仏道に於いて、浄土は如何なる事柄として表わされているのであろうか。

1 真仮の報仏土

親鸞は、浄土を阿弥陀の本願に酬報した報仏土として表わすが、その報仏土について「真仏土巻」には、

既以真仮皆是酬報大悲願海故知報仏土也

と述べられ、真仏土と方便化身土が共に報仏土であると確かめられている。「報土」という言葉には従来、

①衆生の自業に由りて感じたる依報の国土
②菩薩の因位の願行に酬報せる清浄の仏土

という二義が有り、その何れか一方の意味において用いられて来たものである。親鸞も真仏土については、法蔵菩薩の清浄の願行に酬報した清浄の仏土として顕わす。しかし、方便化身土については、本願に酬報した報仏土として顕わすと同時に、

良仮仏土業因千差土復応千差是名方便化身化土(「真仏土巻」)

と述べ、衆生の千差万別の業によって感得した国土であるという義を重ねて領解している。方便化身土をこのように確かめるということによって親鸞は、衆生の名別の業に随順することにおいて衆生の修道における各別性を徹底して批判純化せんとする第十九願・第二十願の方便の願の具体性を表わそうとするのである。

2 本願の仏道

親鸞は、法然の仰せによって「ただ念仏」(『歎異抄』)の仏道に値遇した時、仏道の根拠は「彼仏本願行」(『選択集』)である念仏にのみ在り、自己には無いことを知らしめられたのである。それ故に、自己の仏道理解と修行とによって仏果を志向する教理行果の次第の仏教を断念せしめられたのである。そして、念仏によって実現する仏道を教行信証の次第でもって開顕してゆく。かくのごとく、仏道の根拠は徹頭徹尾本願に在るということを聞思してゆくということにおいて親鸞は、本願に帰するまでの自己の求道の歴程が、「親鸞一人」(『歎異抄』)を本願に帰せしめんがための本願の救済の歴程に他ならなかったということを了受したのである。そのことを親鸞は「化身土巻」において「顕彰隠密之義」ということで明らかにしてゆく。すなわち、『観経』と『阿弥陀経』に第十九・二十の本願を聞き取り、そしてその各々に方便の教・行・信・証・仏土(懈慢界・疑城胎宮)という本願の力用を見い出したのである。そして、かくのごとき具体性こそが、方便化身土の内実に他ならなかったのである。

3 仮と偽

「化身土巻」は本末二巻に分かれ、本巻は仮について、そして末巻は偽について明瞭にしてゆく。その本巻には前述のごとき第十九・二十の本願と方便の教・行・信・証・仏土が顕わされるが、末巻にはその事は表わされない。それは、衆生の目覚めの道として作用する仮が見定められた時、そのような目覚めの道を開示し得ない偽が明瞭となったのであり、そこに偽は仮に選んで開顕されてゆくのである。それは、本願に値遇しない限り必然的に仏道に背反してゆくという、徹底して否定されるべき在り方として人

間存在の質が偽として明らかにされたということであるが、それ故にこそ、本願に値遇すべき存在として人間存在が明らかにされたということである。そこに、偽は何処までも教誡されるべき在り方として顕わされてゆくのである。そして、この様に徹底して仮と偽が明瞭となった時親鸞は、人間の如何なる現実も如来に大悲されてあるのであり、その現実こそ如来の作用する場に他ならないと言い切れたのである。それ故に親鸞は、仮と偽を方便化身土の内容として開顕してゆくのである。それでは、真仏土とは如何なる事柄であろうか。

4　彼国として酬報する真仏土

真仏土は光明でもって顕わされる。光明とは破闇の智慧であるが故に、光明との値遇とは自己の無明の闇が破られるということにおいてのみある事柄である。そして、破闇とは自己の闇を知らしめられるということの他ではない。すなわち、それまで自己が真実と確信していた世界が懈慢界であり疑城胎宮であると明瞭に知らしめられるということにおいて、そこに、自己の闇を知らしめる光明として作用する真仏土との値遇があるのである。それ故に、真仏土とは真仮の分判ということにおいて明瞭となる事柄である。そして、自己の世界を懈慢界・疑城胎宮と知らしめられた存在にとって、光明の真仏土は何処までも彼岸の世界である。このように此国に峻別されて彼国が明瞭となる時にこそ、「彼の国に生まれんと願ず」という願生も純粋に成就するのである。そしてまた、その願生者こそは、彼国の光明が此国の最中に破闇として作用していることを自己における事実として信知する者である。

5　廻向と酬報

『教行信証』には、真実の教・行・信・証・真仏土そして方便化身土が開顕されるが、その教・行・信・証については

夫案(ズレバ)真宗教行信証(ヲ)者如来大悲廻向之利益(ナリ)（「証巻」）

と述べられ、廻向という言葉で表わされる。そして真仏土・方便化身土については酬報という言葉で確かめられる。廻向とは

廻向は本願の名号をもて十方の衆生にあたへたまふ御のりなり。（『一念多念文意』）

と述べられるごとく、衆生の所住の穢土に作用するという、此国の最中における本願の成就を表わす。これに対して酬報とは願生者のうえに彼国として開示され、成就する事柄である。その廻向と酬報の関係は、衆生においては、如来廻向の念仏において自力の執心がひるがえされた時、そこに彼国として真仏土が酬報するのである。そのことが『教行信証』には教行信証・真仏土という次第、すなわち廻向・酬報という次第で開顕されるのである。しかし、此国の最中に作用する念仏は「浄土真実之行」「選択本願之行」（「行巻」）と顕わされるように、彼の浄土の行・彼の如来の行である。そこには廻向を生み出して来る根拠として真仏土が確かめられているのである。すなわち、教行信証の廻向を展開し、そして方便化身土を展開してゆく世界こそが真仏土であり、それが浄土である。

親鸞は『教行信証』の真実教・真実行・真実信・真実証・真仏土・方便化身土の各巻の題号の各々に「顕浄土」という語を冠している。それは、六巻をもって表わされる真実と方便、そして廻向と酬報、その全体が浄土の内実であるという確かめである。親鸞は、このような内実に、本願に酬報した仏身・仏土の力用を了受したのである。その力用こそが浄土に他ならなかったのである。